

令和7年度 八尾市芸術文化振興審議会 第2回ワーキング部会

日 時：令和7年12月18日（木）午後8時～午後8時35分
開催場所：八尾市商工会議所会館3階 多目的室
委員：萩原委員、高安委員、徳委員、平井委員、森本委員、吉波委員
【オンライン参加】藤野委員、村井委員
事務局：杉島、古川、松村、渡辺（文化・スポーツ振興課）
八尾市文化振興事業団：井上さん、【オンライン参加】田中さん
傍聴者：0名

事務局より配付資料の確認。

- ・次第
- ・資料1 八尾市芸術文化振興審議会規則
- ・資料2-1 会議の公開に関する指針
- ・資料2-2 八尾市情報公開条例（抜粋）
- ・資料3 ロードマップの作成について
- ・資料4 芸術祭の開催に向け決めていく事項

1. 開会

事務局より、会議の定足数の確認及び資料2-1、2-2に基づき、会議の公開、傍聴について説明した。

- ・出席委員は8名であり、定足数を満たしている。
- ・会議の公開に関する指針3、4により、審議会等の会議は原則公開。
- ・会議録の各発言に対する委員の氏名は、その他の委員の皆様についてはアルファベットでA委員、B委員等とし、内容は概要とする。

2. 案件

芸術祭のロードマップ作成について

事務局

今回は、2028年の芸術祭に向けたロードマップを作るという特別な目的があり、ワーキング部会を審議会の中に設置したという建付けになっている。ロードマップを作るにあたって、2つの資料を用意した。

資料3は、一般的な考え方として、芸術祭に向けてやることを、企画、準備、運営、終了後という4つのフェーズに分けて書いている。今の時期は企画の段階に当たるので、目的やテーマ、コンセプトを設定するとか、組織をどうするか、実行委員会の立ち上げや、基本計画の策定、資金調達をどうするか、アーティストはどう選定するか、その他もろもろをこの時期にやっていくのが一般的な形だと思い、資料に書かせてもらった。ここから日がたって行くと、具体的な準備や運営に進んでいくことになる。

企画段階のこの時期には、芸術祭の骨格を決めていく必要がある。前回の会議

の中で、八尾らしさとはどういうものか、お客様が温かい、人情があるといった人柄の話や、河内音頭などの地域資源や、まちかどライブクリエイションを実施する中で、いろんなアーティストがいること、また、様々な会場で実施してきたこと、まちかどライブクリエイションは芸術祭のパイロット事業としてスタートしたということから、その集大成を数年に1回やる形がいいのではないか、また、町工場が多いことから、経済や産業とミックスした芸術祭も考え方としてはあるのではないか、まちなかの市街地と高安山を始めとする山々の近くのエリアという特徴的な2拠点に分けて展開してはどうか、この芸術祭を通して八尾をどんなまちに見せたいか、芸術祭で実現していくのがいいというような意見があったことを、参考までに載せている。

ほかには、実施体制をどうするかといったことや、基本計画を作る上で考える必要がある点を書いている。

資料4は、もう少し具体的に、芸術祭の開催に向け決めていく事項として、最も基本的で重要な事項である企画・基本方針に関する事項と、運営体制や予算など企画を実現するための基盤作りで必要なこと、最後に、開催計画に関する事項ということで、具体的な実行スケジュールに関わる事項として決めていく必要があることを記載している。

八尾市の場合として、空白になっているところを今年度中に皆さんで協議し、ある程度埋めて、審議会に報告する形にしたいと考えている。

A委員

私と3副会長と文化・スポーツ振興課で話をしたことを報告させていただきたい。現在こう思っているというところを踏まえたうえで、資料4を埋めていきたいと思う。

まず、名前について、元々は「八尾まちかど国際芸術祭（仮）」でやっていきたいという話で進めていたが、3副会長を含めて話をする中で、国際にこだわりすぎるとぶれてしまうこともあるのではないかということで、国際を外して、「八尾まちかど芸術祭」にしていこうかと思う。この名前については、今年度中に確定させてスタートさせていきたい。今私が思っていることを話しており、決定ではない。「八尾まちかど芸術祭」にしてはどうかという一つの案だ。「まちかど」にこだわっていきたいと思っており、まちかどギャラリーという構想を立ち上げたいと思っているし、まちかどライブクリエイションはこれからも継続で実施していきたい。「まちかど」を八尾の芸術祭のキーワードにしていきたい。2月までには決定できたらいいと思う。

次に、まちかどライブクリエイションは秋にやっているが、2028年は1年かけて、例えば、近鉄八尾エリアは春、久宝寺緑地エリアは夏、やまんねきエリアは秋のように、エリアごとに実施時期を変え、年間を通して、八尾市内のどこかで何かをやっているという形にしてはどうか。今は同じ時期にいろんなところでやっているので、分散してしまっているイメージがある。

また、もっと市民を巻き込み、市民参画型を意識していきたい。いきなりは難しいので、来年度からスタートさせて、2028年には市民の発表の場でもある形がいいのではないかと思う。これはアフターワン博にもつながることで、万博での経験をそこにつなげていければいいのではないか。

また、産業界や商業界とコラボし、何かを作り上げていく、芸術文化の力で

まちを活性化させていく、そういったことができればいい。

市民参画型だけではなく、本物に触れることもとても大事だと思っており、本物のアーティストやパフォーマーも招聘しながら、ああたりたい、あんなことをしてみたいという希望を抱けるようなイベントになって行けばいいのではないか。

また、2028年が八尾市制80周年なので、この芸術祭は5年ごとに実施できるらしいのではないかというイメージを持っている。

話を進めるにあたっては、このワーキング部会のほかに、実行委員会を立ち上げ、そこには例えば小國さんのようなコーディネーターや、伴走される方に入っていただき、具体的な部分を話し合っていきたい。

ただ、方向性はこのワーキング部会で決めながら、それを実行委員会に委ねていくという形になって行けばいいのではないか。

事務局

様々なことをおっしゃっていただいたが、いつやるかとか、誰を呼びたいかではなく、まずは目的やテーマ、なぜ八尾で、後発の芸術祭をやるのか、テーマを決めるところを共有したい。八尾で芸術祭をやる意味について、共通認識を持たないと行けないとと思っている。

A委員

テーマに関しては、各芸術祭で作ったり作らなかつたりしている。下町芸術祭も今年はテーマがなかった。テーマを作るかどうかは皆さんで話をしたいが、私はいらないと思っている。コンセプトは必要だと思う。コンセプトに関しては皆さんで意見を交わして、八尾らしさや八尾の特徴、八尾ならではの芸術祭といったところについて話をしたい。

目的は、我々は条例と計画を持っているということを広く八尾市民に知っていただくことと、有機的なネットワークを作るということが最大の目的であると思う。あとはコンセプトを作り、落とし込んでいくことが大事だと思う。

いろんなイベントをするにしても、このイベントは条例のどこに紐づいていくのかということを考えながら、作り上げていくことが大事だと思う。

私の意見はたたき台なので、もっとこうしたほうがいいという意見をいただきたい。

B委員

やりたいことはたくさんあるが、ここ一年くらい考えていて、皆さんに少しづつお話ししていることがある。僕にとっては畠違いだが、演劇をやりたいと思っている。八尾らしさを前面に出した、八尾の芸術や文化を紹介した新しい演劇を創作したい。演劇は総合芸術でもあるので、音楽やアートなどいろんな人が関わっていくことができる。そういうものがコンセプトとして一つあれば面白いのではないか。少しづつアーティストにお話ししているが、ほとんどの人が賛同してくれている。実現に向けて動けるのではないかという感触を得た。この場で初めて言わせてもらうのだが、アーティストやクリエイターからは面白いねという話はいただいている。

また、そこからクロスメディアとして、物語を絵本にするとか、音楽、歌にするとか、色々展開していけると思う。

僕は一時、群馬県に住んでいたことがあり、そこでは上毛かるたというのがある。群馬県の土地やいろんなものを紹介したかるたで、小学校の時に強制的に買わされて、みんなで遊びながら勉強する。今でも覚えているのが、「つ」が「鶴の形の群馬県」と言うもので、本当に群馬県は鶴の形をしているということを、そのかるたで覚えた。今、全国を回っているが、群馬県の方と出会うと、「鶴の形の群馬県」と言うだけで通じるくらいのものがある。

うえるかむコモンズが先の世代の子どもたちに残せるものとして、こういったものを作りていきたい。その一つが演劇であると思う。また、脚本を簡略化し、八尾市の幼稚園、小学校に配布することで、お遊戯で使ってもらうというような展開をどんどんしていくようなものを考えていきたい。

C委員

B委員が言ってくださった話を聞きした時に、すごくやりたいと思った。いろんな人が関われる作品になるのであれば、すごくいいと思う。私は演劇をやっているので、主体的に関わっていきたい。

前回の会議の中で、河内音頭や町工場が多いといったことや、大阪・関西万博でやったことを引き継いだ形をしたほうがいいのではないかといった意見があったが、それは継続した流れだと思うので、町工場との連携をしっかりと作ったうえでやりたいと思う。舞台芸術だけをやってしまうと、やりたかっただけなんと捉えられてしまうので、町工場と連携することで、産業や経済とミックスした芸術祭というところと、パイロット事業としての集大成として、関わった人たちが何らか参加できるような目的にするのがいいのかなと思う。

A委員

私も一つやりたいことがあり、市民参画型を意識する中で、八尾の商店街がシャッター商店街になりつつあるので、シャッターに市民の皆さんと絵を描いていきたい。全国各地でもシャッターアートはあるが、それを市民の皆さんで描いていきたい。B委員の話を聞いて、その舞台の一場面を市民の皆さんと描いていくことができれば、全部がつながっていくのかなと思った。市内には、プロ、アマ問わず、絵を描く人がたくさんいる。シャッターに絵を描きたい人を呼びかけすると結構手が上がる。

文化振興事業団

皆さん、具体的にやりたいことが先行してしまうのは仕方がないことだが、八尾で芸術祭をやる意味をどこに定めるのか、というところに絞って残りの時間をお話しできたらいいのではないか。

どうしてもイメージしやすい具体的な方に話がいってしまうが、最終的に目的をどこに定めるかを決めないと、企画を絞っていけない。今回はそこを先に共有したほうがいいのではないかと思う。

事務局

具体に聞き出すといっぱい出てくるのはわかる。ただそれをしてみると、何のためにやるのか説明するときに、こんなことがやりたいからですとしか言えなくなる。それは説得力に欠ける。多くの人を巻き込んでこれからやっていかないといけないときに、多くの人を巻き込むための言葉、ストーリーが絶対いると思う。

そこをまず話し合わないと、それぞれのやりたいことだけが出てきて、まとまらずに今まで来たのと同じことになってしまう。

なので、目的のところは意識して、後発である八尾がなぜ芸術祭をやるのか、それは絶対に問われる。今までいろんな地域で芸術祭をやってきているので、ではなぜ八尾でやるのかというところは絶対に聞かれるし、そこをちゃんと答えられるようにしないと、内輪受けで終わってしまう可能性も大きいと思う。

A委員

目的、趣旨になってくると、大きな捉え方をしないといけないと思う。ターゲットは市民参画型の市民だと思っている。後発型の八尾が新たな芸術祭を開催するにあたって意識したいところは、他の芸術祭はどちらかというと、招聘型で、今活躍されているアーティストを招聘し、作品を展示したり、パフォーマンスをしたりということが多い中、八尾は招聘型というよりも、八尾市民の啓もう、啓発、芸術文化を使って、八尾市民の皆さまが今後豊かな生活を送っていくための一つのきっかけになって行くような芸術祭にしたい。見ること、触ること、参加することによって、地域への愛着や芸術に関わることの喜びを提供していくたい。子どもたちに伝えることによって、子どもたちが郷土愛やアイデンティティを育むことにつながっていく。それにより、今まで町工場のイメージやガラの悪いイメージがある中で僕らは育ってきたが、そうではない新た一面、芸術や文化が八尾では広く愛される地域であることに結び付けていきたい。

八尾に暮らしたい、八尾を誇りに思うということにつなげていくような芸術祭にしていきたい。

C委員

それは、八尾市のまちの魅力を内外に発信したいということか。

A委員

発信というよりも、八尾市民の皆さまが芸術祭に関わっていくことによって、自然と発信していくけるような、最近、八尾ってすごいよね、芸術や文化にすごく取り組んでいるよねと言われるようなことになって行けばと思う。それがメディアを通じてか、SNSを通じてかはわからないが、やっていることがエネルギーとして出ていって、外からそれをそういう認識で見てもらえるまちになるようになっていきたい。

C委員

まず、地域の活性化を起こし、そしてそれが、自然と魅力発信につながっていくというのを2028年にめざされたいというイメージか。

A委員

2028年が第一歩である。そんなすぐにはいかないと思うので、継続することによって、だんだんと関わる市民が増えていき、みんなの関わりで広がっていく。

何年かに一度芸術祭をやるとなると、関わりたいと思う人が増え、すごくエネルギーのあるまちになっていくのではないか。

芸術や文化はいろんなものとつながれる。横串を刺せるのが芸術文化だと思っている。そのハブになりたい、ということをイメージして考えているところだ。

D委員

私が方向付けはしないほうがいいと思うが、まず私自身が外者として、八尾市にお招きを受けて、八尾が面白いと思っている一人だ。町工場と先端的なアートが結びつくようなことは、自分でもあまり経験したことがなかった。八尾が持っているポテンシャルは中々のものだと実感として持っている。

ただ、今までの経験で言うと、下町芸術祭もそうだし、別府もそうだが、大半は外者なのだ。外から来た人がある地域に入り込んで、しばらく活動していくうちに、その魅力に気がついて、そこに住んでいる人では気がつかないような価値を発掘してくれる、というのが芸術祭の非常に大きな特徴だ。

いわゆる文化協会というようなところがなぜ停滞してしまうかと言うと、地元の人ばかりだからと言うことがある。そこにいると安住してしまうし、新しいものに気がつかない。あまりにもドメスティックになると、うまくいかないのではないかと感じる。

今、国際を取ろうという話がある。また、八尾らしさ、八尾の特徴、八尾ならではというのが出ているが、これはとても重要なことだと思う。

もう一つは、私自身が、なぜアートを一つのよりどころとして生きてきたかというと、アートは日常生活では出会えないような得体の知れない物である。とてつもない物、ある意味では不気味な物である。人間というのは、自分で自分がわからぬといし、不気味なわけだが、アートはそういうことを可視化してくれる。本当に深いところで経験させてくれるから、アートの力はすごいなと僕は思っている。

そういうアートの持っている得体の知れない物、不気味な物といったところが、これまでのやおうえるかむコモンズのアートの動きの中では少し物足りないところもある。

例えば、下町芸術祭の場合は、ダンスボックスを中心となっている面はあるが、先端的なコンテンポラリーダンサーたちが、日本中から集まって住むようになっていて、今まで僕自身が経験しなかった、見たことがないような表現が、まさにまちかどで展開できるようになっている。そういうアートの意味で先端性というのも重要だと思っている。外からの視点、先端性、得体の知れない物というのも、意識的に入れ込んでいく必要があるのではないか。

ただ、八尾を5～6年見ていて、皆さんにぜひ読んでほしい本がある。鶴見俊輔の『限界芸術論』の中で、鶴見が素晴らしいことを言っているので、少しだけ紹介する。

今日の用語法で芸術と呼ばれている作品について、純粋芸術を英語でピュアアートと読み替えることとし、純粋芸術に比べると俗悪なもの、非芸術的なもの、偽物芸術と考えられている作品を大衆芸術、ポピュラーアートと呼ぶこととし、両者よりもさらに広大な領域で、芸術と生活との境界線に当たる作品を限界芸術、マージナルアートと呼ぶことにしてみようと、彼は提案している。

純粋芸術というのは、専門的芸術家によって作られ、それぞれの作品の系列に対して親しみを持つ専門的享受者がいるもの、例えばクラシック音楽や現代美術などのことを指す。それに対して、大衆芸術は、これもまた専門的芸術家によって作られるはするが、制作過程はむしろ企業家と専門的芸術家の合作の形を取り、その享受者としては大衆が位置付けられる。例えば、吉本興業などを考えればよい。

それに対して、限界芸術は何かというと、非専門的芸術家によって作られ、非専門的享受者によって享受されるものだ、という言い方をする。つまり、職業として芸術家になる道を通らないで生きる大部分の人間にとて、積極的な仕方で参加する芸術のジャンルはすべて、限界芸術に属するのだ、という言い方をしている。

芸術の意味を純粋芸術、大衆芸術より広く、人間生活の芸術的側面全体に対応するということがとても重要で、その時、生活の様式でありながら、芸術の様式でもあるような両生類的な位置を占める限界芸術の側面がはっきり出てくる、というすごく重要な言い方をしている。

僕は、八尾で極める、追求すべき芸術祭は、鶴見俊輔が限界芸術という言葉で言っているようなものになってくるのではないかと思う。こういう思想を皆さんと共有した方がいいのではないかと思う。

C委員

『限界芸術論』について、まさに八尾市はやっている途中なのではないかと私も思う。生活の中に芸術があるということと、専門家だけが専門性を持ってやるわけではないということだと私は理解している。

事務局

もう時間ないので、皆さんの意見を聞くことができないが、いったん今日は終わりにさせていただく。目的なども掘り下げて話せていないし、テーマやコンセプトは一番大事なところなので、時間をかけても皆さんでしっかり話をして共有しないと、しっかりした芸術祭にならないと思う。

次回、もう一度話をしたいと思うので、皆さんも考えて来ていただけたらと思う。思いつくことがあれば、個別にご連絡いただくことも可能だ。